

平成 19 年度産業技術連携推進会議ライフサイエンス部会

第 28 回デザイン分科会議事録

■ デザイン分科会 本会議

1. 開会

司会（熊本県産業技術センター原口氏）：

それでは、予定の時刻を過ぎましたけれども、ただ今より、平成 19 年度産業技術連携推進会議ライフサイエンス部会第 28 回デザイン分科会を開催いたします。お手元の議事に従い、進行させていただきます。本会議の進行を務めさせていただく熊本県産業技術センターの原口です。よろしくお願いいたします。

それでは初めに、デザイン分科会の志甫さんより挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

2. 挨拶

分科会長（デザイン分科会長；石川県デザインセンター志甫氏）：

皆さん、どうもこんにちは。志甫でございます。この会場が非常に立派なんですけれども、12 時半から開場しましたので、準備がバタバタしておりまして、5 分程遅れまして、申し訳ございません。

まず最初に、毎回のことなんですけれども、こういう立派な会場で、皆さん、全国から集まってきたいただき、盛況に開催できました。準備も非常に大変だったと思います。開催担当の熊本県の皆様には、会を代表してお礼を申し上げたいと思います。

去年、鳥取の地では、新しい技術部会について、デザイン分科会を今後どのように活動していくか、どの部会に所属していくかという議論をしたと思います。そして、こちらの看板にもありますように、通算では 28 回ですけれども、今回が新たにライフサイエンス部会での初回ということになります。

これもご縁かなと思いますのは、熊本県というのは人間中心のユニバーサルデザインを取り入れたまちづくりやものづくりをされている県でもございます。そういうことも幸いしてか、熊本県とご縁があって、回を持たせていただいたことを感謝しております。

それに増して、今回は、地方公設試の皆様方以外に、主に国の方からゲストということで多くの方を招いております。この場で紹介させていただきますと、まず、ライフサイエンス部会から産総研の、池田様、橋本様、経済産業省から諸永様、NPO キッズデザイン協議会から小野様、製品評価技術基盤機構から矢野所長、久本様、三浦様、人間生活工学研究センターから畠中様に来ていただきました。多くの方を招いておりますので、色々と最近の情報をご提案いただいたり、分散研究会にも入っていただきますので、なるべくお互いで情報交換などをしていただければと思っております。

私の方からは2点程ございまして、まず1点は、やはり本会議の中で分散研究会がコアな部分になると思うのですが、提案事項等々でいただいた情報を基に色々な情報交換や意見交換を活発にやっていただきたいということです。

また、新しい部会の体制になり、ライフサイエンス部会の方から自分がお話を伺ったりしていく中で、ポジティブな活動を目指したいということを少し考えております。これだけの人数を一緒にということはなかなかできないわけですが、成果発表会など前向きな活動が少しできればと思っております。そのような内容を分散研究会の中でのなるべく討議していただきたいというのが分科会長からのお願いということなのですが、そういったことも含めまして、今日は、活発な議論が成されるということをお願いしたいと思っております。

少し長々となりましたが、ご挨拶と代えさせていただきます。以上です。

司会：続きまして、開催県を代表しまして、熊本県商工観光労働部産業支援課立川が挨拶を申し上げます。

立川氏（熊本県商工観光労働部産業支援課）

皆さんこんにちは。本日は、平成19年度産業技術連携推進会議ライフサイエンス部会第28回デザイン分科会の開会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。私は、紹介にも預かりましたけれども、熊本県商工観光労働部産業支援課の立川と申します。本日は私共の課長がどうしてもはずせない公務がありましたために、私が代理で参上している次第であります。

3. 議長選出

司会：どうもありがとうございました。続きまして、議長選任ですが、恒例によりまして、開催県であります熊本県産業技術センター所長柏木が議長を務めさせていただきたいと思っておりますが、ご承認いただけますでしょうか？

（拍手）ありがとうございます。それでは、柏木所長、よろしく申し上げます。

4. 議事

議長（熊本県産業技術センター柏木氏）：

ただいま紹介いただきました熊本県産業技術センターの柏木でございます。通常、開催県の長が議長を務める習いということで、議長を務めさせていただきます。実を申しますと、私はこの3月まで今の立場と関係ない民間のものだったのですが、この4月から熊本県産業技術センターの所長という役目になりまして、今日、この議長を務めさせていただくことになりました。また、専門分野も、今日はデザインが専門分野の方ばかりとか。私自身は3月までは半導体の研究者でありまして、いわゆるハイテクの技術開発に明け暮れており、正直、皆様方のキャリアとは全く反対の極におりました。ただ、私は最近、この5年位、シ

リコンバレーの会社に関係したことがありまして、いわゆる産業分野におけるマーケティングの意味というものを肌身に感じております。まあ、日本の企業に居られる方の方が遙かにマーケティングの意味というものを実感しておられると思いますが、マーケティングが持つ産業技術に対するインパクトです。この4月になりまして、私ども、今日司会をされている原口さんとか、デザイン関係の職員の方から色々教育されまして、マーケティング、産業技術におけるデザインのインパクトへの認識を新たにしているところであります。まず、今日のこの会合には、認識を新たに、全然違った分野ですが、議長を務めさせていただきます。

この会議の趣旨が、デザイン分科会長の志甫さんより伺ってみると、全国の公設試に広がっているデザイン分野のキーパーソンがお集まりになる、そして、色々な意見を交換し、もっとプロアクティブな方向に持っていきたいという方針で、非常に積極的な意見を持っておられる。それに向けて、皆さんのそれぞれのお立場で、色々なご意見や構想をお持ちになってこの会議に臨んでいただきたい。あとは、熊本県の立川さんからご紹介があったように、交流会も企画されておりますし、せっかく熊本までお越しいただいたので、ぜひ楽しんでお帰りいただきたいと思います。それでは、自己紹介がてらの挨拶はここまでさせていただいて、議事に入っていきたいと思います。

1) 連絡事項

まずは、このデザイン分科会を取り巻く状況に関して、いくつかのご報告をいただきたいと思います。初めに ライフサイエンス部会の副会長でいらっしゃる池田さんよりお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

副会長（ライフサイエンス部会の副会長；産総研池田氏）

ただいまご紹介に預かりました産総研産学官連携推進部門に所属しています、且つ、ライフサイエンス部会の副会長を仰せつかっています池田と申します。よろしくお願いいたします。

初めてライフサイエンス部会のデザイン分科会という場に参加させていただいております。さすがに出ている資料などもカラフルで、デザイン分科会は違うなと思いました。今までは、バイオテクノロジーとか、医療福祉関連の分科会に出ていたんですけども、デザイン分科会という良い分野がライフサイエンス部会の方に入ってきたなどありがたく思っております。それでは、ライフサイエンス部会の活動報告をお話しして下さいとのことでしたので、ホームページにも掲載されております重点活動について報告させていただきます。

基本方針は、地域産業の発展に資することを目的とし、6つの項目に留意しつつ、各情報の交換、研究成果の紹介、技術移転活動とともに外部予算獲得支援、及び人材育成、交流等の活動を行うとなっております。

1番目が、分科会主体による実質的な活動を重視ということで、3つの分科会を設置しております。バイオテクノロジー分科会、医療福祉技術分科会、デザイン分科会の3つです。2番目として、形式にとらわれない効率的、迅速、実質的な活動をやっていこうということで、電子メール、メールマガジン等の積極的利用による速やかな情報交換及び研究成果紹介等を行う。また、状況に応じては部会総会を書面開催で行うこととなっております。3番目に、活動成果のフォローアップおよび次年度活動への反映、4番目が、地域部会との緊密な連携、5番目が、他の技術部会との連携、最後に6番目が他の関連機関の連携ということの基本方針としております。

さらに重点活動ということで、7つの項目があります。

まず、1つめに、各種情報の交換、研究成果の紹介、技術移転活動及び議論の場の設定ということで、電子メール、メールマガジン等による情報交換、研究紹介等を行っております。実は、先月6月に、第1回のメールマガジンを配布させていただきました。そこには、小高部会長の挨拶、各種イベントを紹介させていただきました。少しずつ反響がこちらの方にきております。今後、数ヶ月に1度ずつメルマガを配信していければと思っております。次が、分科会活動の地域版なんですけれども、地域部会との連携により必要に応じて技術部会分科会と地域部会分科会との合同による地域での発表会等を行う、この場合、企業からの参加を積極的に勧めるということで、できるだけ地域企業の方と連携をしていきたいと思います。

続いて、分科会活動の全国版ですけれども、毎年2月頃に行われるバイオテクノロジー分科会とライフサイエンス分野融合会議との典型による発表会を行っていこうと考えております。そして、医療福祉技術分科会では、毎年やっているのですけれども、医療福祉技術シンポジウムを行っていこうとなっております。さらに、デザイン分科会では、春の総会と秋の発表会ということです。

2つめに、活動の成果普及及びビジネスパートナーの探索ということで、医療福祉技術分科会の方で国際福祉機器展に合致して、そこに出席していこうと。これは、毎年10月頃に東京ビッグサイトにおいて開催される展示会に出席していこうという計画であります。

3つ目に、外部予算獲得支援ということで、地域部会が行う外部資金獲得を支援していく。

4つ目が、人材交流、育成支援ということで公設試職員、中小企業技術者の人材交流を行っていこうと計画しています。

さらに5番目ですけれども、分科会間の連携、バイオテクノロジー、医療福祉、デザイン分科会の連携を行う、あるいはこれらの分科会の交流の可能性を検討していこうということになっております。

6つめは、他の技術部会との連携可能性の検討で、バイオテクノロジー分科会がナノテクノロジー・材料部会と連携していくことが挙げられています。

最後の7つめになりますけれども、他の機関との連携の可能性の検討ということで、バイオテクノロジー分科会については、(独)食品総合研究所、(独)酒類総合研究所との連携、医療福祉技術分科会については、国立身体障害者リハビリセンター、デザイン分科会については、人間生活工学研究センター、日本産業デザイン振興会との連携の可能性を検討していきましょうということです。大体、以上です。

議長：今のお話しに関して、ご質問、ご意見はございますか？ないようでしたら、続きまして、製品評価技術基盤機構の方からお話しいただきたいと思います。

矢野氏（製品評価技術基盤機構）：

ただいまご紹介いただきました製品評価技術基盤機構の矢野です。名前が長いのでナイト（NITE）と呼んでおります。今日は、親組織である経済産業省の方からこういう会があるという情報をいただき、出させていただけないかということで志甫さんに連絡し、この場にいるわけですが、三人寄れば文殊の知恵といいますか、これを機会に皆さんの仲間に入れていただければと思っております。今日は、私共、NITEの概要と人間工学関係の業務について少しご説明させていただきます。

私どもは、安心、安全の確保というのが大きなミッションで、このために人間データを含みます技術用語の整備、収集、製品安全をはじめとした法規制の執行機関という2つの役割を担っております。基本理念と書きましたけれど、設立した時に、信頼できる技術と情報を基に暮らしの安全、安心に貢献ということで、4つのセンターを持っております。

一つはバイオで、現在、世界で3番目、8万個レクシオン位保有しております。このコレクションの量が国力が決まります。そして、化学安全。これは、化学安全のお巡りさんと言って良いと思いますが、ここのホームページは年間500万件程のアクセス件数を持っております。そして、適合性。これはいわゆるトレーサビリティです。最後に、私どもの生活安全という4つの分野において、職員400人、非常勤200人の600人体制、予算規模が年間100億円弱でそれなりの組織の形を取っております。

NITE自身は1928年ですから、79年前、当時、商工省、現在の経済産業省の一部署として発足しました。当時、絹製品が輸出製品として花形だったのですが、日本のブランドを守るために国自身で検査をした時代があったわけです。そこからスタートし、色々形を変遷しまして、2001年、独立行政法人の法律ができました時に経済産業省と袂を分かれて、現在のNITEになっております。全国組織をしまして、600人の予算100億規模でやっております。

人間関係は、標準センターというところでやっております。標準センターには色々な仕事があるんですけれども、一つは、人間特性データの開発です。今日、一緒に来ております久本、三浦はこの中心メンバーであります。今、社会では色々なことが起こっておりますが、言わずとした高齢化です。70才以上の高齢者人口が1000万人で、スウェーデンの人口が

900万人です。今後、団塊の世代が加わると3000万人ですから、カナダの総人口と同じになるという問題を抱えております。例えば、死亡事故。現在は交通事故よりも家庭の中でなくなるおじいちゃん、おばあちゃんの数が多くなっています。これは統計による死亡事故ですが、九州大学によるとお風呂で転倒したことが原因でなくなる方が1万3千人となっており、交通事故の倍ぐらいあるわけです。こういう風に社会が段々変わっていく中で、私共は2つのルール作りと言っておりまして、人の能力と製品の要求の間にどうしてもギャップがあるわけです。ギャップがなければ、安心、安全な社会ができるわけですが、この差をどのように埋めていくかという点、一つは製品の方に負荷を与える、例えばユニバーサルデザインのようなものです。もう一つは、人の能力に下駄を履かせるようなもので、支援製品、日本では講義の福祉製品と呼ばれるものでアプローチをしているところです。私どもは、人間中心のデザインでものづくりをすることで、社会は安心、安全、満足を得られる、また、こういうものづくりを勧めていくためには、人間のデータの裏付けがないとしっかりしたものがないのではないかと考えている。そして、こういうことをやることで社会的責任につながっていくのではないかと考えております。

人間特性データは、今後の分散研究会の方でうちの三浦が詳しく説明しますが、ここで簡単に説明します。ここにものづくりのフローを描いたのですが、色々な人間特性データが求められています。安心、安全のものづくりのために人間特性のデータベースを作って、ネットワークで結んでおります。昨年、文部科学省とリンクを取りまして、将来的にはプラットフォームを作っていきたいと思っております。今年の2月、人間特性の関係で文部科学省よりセンターオブエクセレンスの指定を受けている九州大学さんと連携協力協定に署名をしました。また、今年の6月に九州大学さんは東京都六本木のミッドタウンに東京オフィスを作られました。そこで合同セミナーを開催しております。そして、私共は、全国の公設試の皆さんともこのような連携を深めていきたいと考えております。将来的には、企業、大学、研究機関等が関わるプラットフォームを作って、産業界関係部門に提供していきたいです。現在は、中国と連携を行うための準備を進めているところです。今日は資料も配っておりますけれども、ご質問があれば、私、久本、三浦の方にいただければと思っております。東京には常設の展示場、大阪には研究室がございますので、近くにお越しの際にはお立ち寄りいただければと思っております。是非、これを機会に皆さんと連携し、三人寄れば文殊の知恵の成果を出したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

司会：今のお話しにつきまして、ご質問等はございませんか？続きましては、人間生活工学研究センターの畠中さんからのお話しをいただきたいと思っております。

畠中氏（人間生活工学研究センター）：

こんにちは。人間生活工学研究センターの畠中です。よろしくお願ひします。今日の配付資料の中に、私共の活動の紹介のチラシを3枚入れさせていただきます。一つは、新しい人体寸法データのご紹介、二つは、教育、教材とか、年間通して行っている講座「人間生活工学」のご紹介、この裏面には、夏セミナーをやりますというご紹介なので、時間があれば見ていただければと思います。そして、皆さんが一番興味を持たれるのではないかというのが新しいデータベースではないかと思うのですが、3年間取り貯めたというのは、その都度、皆さんにご報告していましたが、ようやくこの秋から皆さんにご提供できるようになりますので、もうしばらくお待ちいただければと思います。採取した人数とか、どういう部位があるのかといったことは、今、分かる範囲ではそのチラシに載っていますし、これから皆さんにご提供する情報は、ホームページに順次載せていきますので、色々見ていただければと思います。そして、皆さんのところから県内の企業の方々にこの情報を発信していただいで、県として皆さんで有効的に活用していただければと思います。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

司会：どうもありがとうございました。何かこの際に伺っておきたいことはありますか？お話しの後といたしまして、経済産業省デザイン・人間システム政策室の諸永さんにお話を伺います。

諸永氏（経済産業省デザイン・人間システム政策室）：

こんにちは。経済産業省の諸永でございます。よろしくお願ひします。私が、このデザイン分科会の方にお邪魔させていただくのは、前回に続き、2回目でありますけれども、まさに、我々の名前がデザイン・人間システムという形で来ているということは、今まさに、NITEさん、HQLさんの方から、このデザインの分科会ということなんですけれども、人間側の視点でお話しをしていただいたと思います。さて、デザインと人間中心で考えていたところは、表裏一体、そして、我々、経済産業省の製造産業局、まさにものづくりを支援している機関においては、それを同じか、私のところで一緒にやっているというのが現状でございます。従って、このデザイン分科会にお集まりの公設試の皆さんもまさに同じ思いだと思いますので、デザインというものを語る時には、色、形ではなくて、もっと広いコンセプト、そして、人間から見てどうなのか、いかに使いやすいか、安全といったところを、デザインという言葉で考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

今日は資料をたくさん配布しておりますが、時間も限られておりますので、かいつまんでお話しさせていただきたいと思ひます。そして、我々の部屋の仕事といったところは、今日はお話ししませんが、たまたま九州経済産業局から配布させていただいたパンフレットの44ページに我々の仕事の概要といった感じで載せさせていただいておりますので、時間のある時にご覧になっていただければと思います。

今日、ご紹介させていただく内容は2点ございます。まず、1点目は、昨年度よりデザイン分科会の方々にご協力頂いております、キッズデザイン賞、キッズデザインの取り組みに関してご報告と、感謝を含めましてお話しさせて頂きたいと思っております。

まず、お手元の資料の方に、経済産業省のフリップで、キッズデザイン賞の募集について、3月2日の報道発表のリリースがあるかと思っております。キッズデザインという言葉自体は、まだ聞き慣れない言葉かもしれないですが、それは、昨年、経済産業省と、今日もお出でいただいておりますNPOという形で立ち上がっておりますキッズデザイン協議会を中心として、初めて作って、商標登録等を行っている言葉でございます。まだ耳慣れないというのは、新しい造語でございますので、是非、これから皆さんで活用頂ければと思っております。

このキッズデザインという言葉は、言葉では良く分からないというところがございます。子供達の安心、安全と健やかな成長、発達を社会全体で考えていこうということを考えています。そして、これはキッズという言葉がついていますが、安全を考えるということや、先程の事故防止という風な、高齢者の事故という話もございましたが、子供の事故を無くしていこうというデザインを考えていく、これは、子供だけではなくて、大人そして高齢者の安全は当然高まるという意味で、ある種の不慮の事故といわれる事故を防いでいくためには、子供は、言い方は悪いのですが、感度の良いセンサーとして、探求心、そして発想力の良いセンサーとして考えますと、やはり子供が事故に遭わないということを考えていくと、社会全体の安全が高まると思っております。そのような気配り、配慮というものを社会全体で持っていきたいという願いから、このキッズデザインという言葉を生み、そして、経済産業省が中心となっておりますけど、企業の方々、自治体の方々にお集まり頂きながら、今、NPOという形で、70近くの団体が入る形で勧めている段階であります。こちらのパンフレットの協議会の案内の中に参画団体の会員一覧というのがございます。たくさんの企業の方々、自治体の方々の中に、こちらの熊本県も自治体会員としてご参加頂いているわけですが、この自治体と一体になりながら、このような動きを進めているところでございます。

そして、キッズデザイン賞でございますけれども、そのような子供達の安心、安全と健やかな成長、発達を「もの」、そして、「こと」、この県の取り組みで行った小学校の授業とか、そういうことも含めて表彰していこうという制度が、先程、3月2日のプレスリリース以降、5月中に1ヶ月程度募集を行いまして、ちょうど今、審査を行っております。これはまだ表には出しておりませんが、300点弱の応募を初年度はいただきました。そして、ちょうど審査を終えた、第1回のキッズデザイン賞の受賞作品の発表会といったものを8月9日から東京の表参道の方で行います。こちらのご案内の方は、お手元にキッズデザイン賞募集要項という形で報道発表の別紙2の一番最後のキッズデザイン博2007の実施という形で8/7～11ということになっておりますが、ちょっと準備に時間がかかりまして、8/9～11で一般公開を行います。そして、公設試のデザイン分科会の方々におかれましては、8日が報道発表、そしてプレスデーという形でいきますので、分科会の方でツアーという形で組んで頂け

れば、8日でも対応させて頂きたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。そして、キッズデザイン賞に関しましては、先程から安心、安全と健やかな成長、発達ということをおっしゃっていますが、これはデザイン性だけではなく、例えば、誤飲防止という形でどういう寸法にしたのか、どういう実験を行ったのか、または、滑りにくいという靴はどのような検査で行ったのかという言い値ではなくて、どういう風なバックエビデンスを基に、そのような主張を行っているのかということ、応募いただいた方には付けて頂くという審査を行っております。そういう意味では、なかなか中小企業をはじめとするところでは、自社でそのようなデータを取れているところは少ないということもございまして、公設試の皆様にもそのような試験を含め、そして指導を含めご協力頂きたいということ、今年度も、そして今後もお願ひさせて頂きたいと思っております。

大阪府、広島県、宮崎県、福井県、この4つの公設試の方々には、問い合わせ先という形で、応募要項の2ページ目に連絡先、担当の方のお名前を掲載しております。このような動きを、来年度以降、キッズデザイン賞が続く限り、どんどん広げていきたいと思っておりますので、このお願ひを、また時期が参りましたらさせて頂きませんが、ここに名前を出すという以前に、皆様がユニバーサルデザインといったことを含めて、色々な中小企業の方々を含めて、色々な製品を開発されたり、研究をされたりしていると思っておりますけれども、子供という目線、そして先には社会、高齢者の安全も含めてキッズデザインという概念に、是非、皆様にご協力頂きたい。そして、賞に応募する、しないは結果だと思っておりますので、その目線を広げていきたいというのが我々の願ひですので、そのような視点で色々なユニバーサルデザインに取り組んで頂きたいと思っておりますし、そして、最後に、我々のデザイン性を良くしていく、気配りをして、結果として商品として売れて頂く、それが市場に広がるということが、この安心、安全の製品を普及させる意味では大変重要だと思っております。そういう意味では、結果的に賞に応募頂ければと思っておりますし、そのような形でもご協力頂ければと思っております。そして、受賞作品に関しては、こちらのパンフレットの表紙にもありますキッズデザインマークというものが商品につくという形で展開していきたいと考えていますので、是非、今後、このキッズデザインという動きにご協力頂ければと思っております。これが、第1点目のご報告とお願ひと感謝でございます。

もう1点、我々、経済産業省で進めている動きのところ、感性価値創造イニシアティブというものを今年の5月22日に取りまとめました。これもまた聞き慣れない言葉で、大変恐縮なのですが、要は、「もの」や「こと」、「サービス」を考える時に、より機能が良い、品質が良い、安いという風なそれぞれの価値観に対して、もう一方で何か感動や共感を得る、例えば、長く使っていくとか、愛着が持って使っていくといったことを含めて、感動や共感を得るものづくりというものです。どうしても我々の産業政策、政策という意味での産業支援では、高機能、高品質、低価格にといったものに今まで取り組んできました。やはり、今まで企業の方が企業のノウハウとして当然やられた部分だと思うのですが、今後、海外に展

開していく国の産業、ものづくりをしていただくためには、この感動や共感といったところを、市場も含めて、生活者レベルも含めて取り組んでいきたいというのが、この感性価値創造イニシアティブというものに込められた、産業政策の転換の基点だと思っております。

我々が感性価値という言葉でまとめながら産業政策に取り組んでいることは、概要という形でお手元の方に配らせて頂いております。少しご覧いただくと、今日も九州の事例とか、山梨の事例とかがお手元に配られています。それぞれデザインをやった時に、こだわりのポイントはここですよとか、本当に伝えたいメッセージはここなんだというのが商品に込められていると思います。実は、その材料選びや素材開発といったところにもそれぞれの思いはあるんだと思いますが、そういう風なことを、より使い手、そして消費者の方々に訴えていこう、そして、購入者である使い手、生活者の方々はそういう風なものをより選択していこう、そして、もっとこうした方がよいという風なものがあれば、作り手の方に戻していこうとことです。我々は共に創ること、「共創」と唱えていますけれども、このものづくり、我々のいう感性価値というものを作り手と使い手と共に創っていこう動き、これは国民運動といったことも含めて、色々なことを、今年を零年としまして、来年、再来年、その先と3カ年を感性価値創造イヤーと経済産業省が掲げまして、重点的に取り組んでいきたいと思っております。是非、皆様もそういう風なもののこだわりとか、作り手の思いを、いかに使い手の方へ伝えていくか、もしくは、皆様がよくご存知の方々が本当はこだわったり、すごく良いものを行っているのだけれども伝えきれてないなというところは、まさに、デザインの力だと思っておりますので、そのようなサポートをして頂くと共に、どうしても、結果としてそれが売れていかないと、我々としては市場に届かないということになりますので、それを消費者に伝えていくといったところの支援も、是非、一緒にやっていただければと思います。そして、このような報告書は、報道発表の1枚紙を付けておりますけれども、その下の欄に、ホームページのアドレスを掲載しております。こちらのアドレスより資料の47個の事例集と、本文、ご協力いただいた方のお名前等の資料がダウンロードできるようになっております。是非、お帰りになられたらご一読頂きますをお願いします。

あと、このような形で本の出版も行っています。これは、刊行物センター等には並んでいりますが、同じものがダウンロードできます。本の形が持ちやすいということであればご購入頂いて、読むだけであるのであればダウンロードをお勧めします。少し時間を超過しましたが、以上でございます。

2) 提案要望事項

議長：どうもありがとうございました。続きまして、本分科会開催にあたって、皆様方からお寄せいただいたご提案、ご要望に関しまして、デザイン分科会長の志甫さんの方からコメントをお願いします。

分科会長:本会議資料の2ページ目に事務局の熊本県さんの方で提案要望事項ということで、種別の違うものも含めてまとめて頂いております。お読み頂ければ良いというものも多々ございますが、いくつか私の知っている範囲でコメントをさせてもらい、それに対してまた何かご意見等があればということで進めさせていただきます。

先程、池田さんの方からメルマガの話があったんですけども、あれは、ライフサイエンス部会の方に登録した人に対して送られていると考えればよろしいのですが、滋賀県さんの方から分科会のメーリングリストという話がございますけれども、私の記憶によれば、この分科会（滋賀県運用）のメーリングリストというのは既に使っておりますし、また、昨年、ライフサイエンス部会の方から登録希望者を募ったもので、登録希望された方だけのメーリングリストが既にできていると思います。そういうことで、質の違う2つのものがあるとうご理解頂ければと思います。

それから、この中で、広島県さんの方から全国の公設試やデザインセンターの成果の発表や各県の若手デザイナーが、ということで、いわゆる発表の場ということでご提案されていると思います。それで、先程の池田副会長の方からも出ておりましたけれど、例えば、ミッドタウンの産デ振の青木さんなどとも意見交換を行ったりしているんですけども、そこに限ったりしているわけではありませんが、何か、そういう成果とか発表の場を、会として、あるいは中のグループとしてできないのか、その可能性があるかどうかを私の方でも検討したいと思います。そういうことも含めて、分散研究会の方で議論して頂ければと思っておりますので、よろしく願いいたします。あとは、分散研究会に関わることでですけども、これに関しては、後でコメントさせて頂きたいと思っておりますので、私の見させていただいた限りでは、この成果発表等の活動についてと思っております。私の方からのコメントは以上です。

議長：どうもありがとうございました。この際、何かご意見はございますか？

副部長：意見というか、このメルマガジンを作っているんですけども、話題を皆さんの方から寄せて頂くと、非常に作りごたえもありますので、ちょっとしたことでもこちらの方にメールで頂ければ、ありがたいと思っておりますので、よろしく願いします。

分科会長：ちなみにどのくらいの数を、さっきの3分科会を中心に流れていっているのでしょうか？

副部長：多分、各公設試の代表者の方にいっているのではないかと思うんですけども。久場さんが担当者なので、手元には情報がなく、私の方では分からないのですが、多分、各公設試の方には行っていると思えます。

橋本氏（産総研産学官連携推進部門）：

産総研の橋本でございます。ライフサイエンス部会の小高部会長の向かいの席におりますので、日々、作業内容が聞こえてきますので、ちょっとご説明しますと、ライフサイエンス部会のメールマガジンは、各公設試の代表の方に送られていると思います。メールの最後に、機関内の皆さんへの転送をお願いしますということが書いてあると思いますので、将来的には、希望される皆様へ配れるようになると思うのですが、とりあえず今は、各機関ごとに代表者を決めて、そこに送られるようになっています。

ちなみにバイオテクノロジー分科会の方でもメールマガジンを出してしまっていて、たまたま、両方とも小高さんがトップをやっているということで、一気に立ち上げてしまっていると思うのですが、細かい情報については、分科会の方で出した方が良さだろうということで、部会の方は、全体に関わるものということで、少し情報の頻度の方が少ないと思います。まだ手探りなので、この先、会員の皆さんからのご意見で運営が変わっていくような気がするのですが、部会については、一個引いた形でメールマガジンを出すということで小高さんが言っていました。

聞いた話なので、不正確な部分があると思いますが、この様な感じですよ。

分科会長：今お聞きした限りだと、途上という感も受けますので、情報提供に関しては、一回私の方のご相談頂ければ、状況等もご報告も含めて流させていただきますので、よろしく願いします。

鳥田氏（宮崎県工業技術センター）：

今の件に関してですけれども、一度、5月位にメールがあったと思いますが、その件と連携している話でしょうか？

分科会長：私の理解では、そこが今ごっちゃになっていたのですが、メーリングリストに登録しますかということに対応されたと思うんですが、登録された方のリストが一度配られたと思います。それで、今メルマガの話と混同しましたが、メルマガの方は機関長に行っているということですので、連動しない、別のものですね。

議長：他にありませんか？

山下氏（滋賀県工業技術総合センター）：

滋賀県ですけれども、この項目を出させてもらいました。どうということかと申しますと、メールが若干、重複しますので、できればきっちり整理して頂いて、どちらが主で、どちらが従でというのを決めて頂きたいと。

分科会長：できれば、先程、鳥田さんの方からも出ました5月からのライフサイエンスの方のメーリングリストでは、デザインというくくりで見ると、現在、滋賀県さんの方でされているものと比べて少数と見ています。例えば、こういう分科会等の活動に関しては、現状活用しているものを利用して、ライフサイエンスのものはもう少し大きくなりになりますし、しかも、機関長といった話も出てきます。それに、今、滋賀県さんで運用しているようなメーリングリストに流れている話題が出ていくのも変な話ですし、今のところは少し様子を見させて頂きたいというのが正直な気持ちです。

山下氏：今、情報が交錯しそうでしたので、では、様子を見るということで。

議長：他にございませんか？では、ここで3つの会場に分かれまして、この後の分散協議に移りたいと思います。では、分散協議の詳細について、志甫さんからお話し頂きたいと思います。

分科会長：詳細と言いますより、お願いでございますが、お手元に3つの分散研究会の名簿がいつているかと思えます。それで、いつも座長と言いますか、進行役と、後で、まとめ報告をする方を事前をお願いしてございます。まず、ユニバーサルに関しては、引き続きになりますが、東京都の阿保さんの方をお願いしています。それから、デジタルの方は佐賀の川口さん、地域に関しては三重県の榎谷さんの方をお願いしております。よろしく お願いいたします。

それで、皆さんも名簿を見られてお気づきと言いますか、今回だけではないのですが、デジタルデザインの研究会は段々人数が少なくなってきております。以前は、この部分が凄く多かったわけですが、一つの流れと言いますか、川口さんともお話しして、今後のデジタル研究会のあり方についても議論をしたいと伺っております。

それから他の研究会ですけれども、ユニバーサルデザイン研究会はゲストスピーカーもいらっしゃいますので、かなり情報が得られる内容になると思えます。地域の方は、冒頭でもお願いしましたが、少しデザイン分科会の活動と言いますか、そういったことをお話し頂けるようになれば、といったことをお願いとして申し上げておきます。私からは、以上です。

司会：それでは、議事次第にありますようにそれぞれの研究会の会場に分かれて、休憩を挟み、14時20分から分散討議を開始して頂くようお願いいたします。

3) 分散討議

- ・ ユニバーサルデザイン研究会

- ・ デジタルデザイン研究会
- ・ 地域デザイン振興研究会

4) 全体討議

- ・ 各研究会の報告と全体討議

ユニバーサルデザイン研究会（出席 22 名）

座長：阿保さん（（地独）東京都立産業技術研究センター）：

本研究会は、17 機関、3 機関オブザーバーにより行われました。まず自己紹介を行いました。この研究会は、「人にやさしいものづくり」をテーマに行なっています。参加者の皆さまから、研究会の議論を高めていくために、UDに関連した報告を主に自己紹介を行いました。それとメーリングの実態として、登録しているか、活用しているか、デザイン分科会への程度参加しているのか、そのようなことも交えて報告して頂きました。

取り組みの報告が終わりまして、NITE さん、HQL さんより情報提供をいただきました。内容は割愛させていただきます。

人間工学に関する研究にテーマをしぼって、人間の手とモノの関わりについて議論を進行させていただきました。3 機関からの発言があり、寸法データをどうするか、どこまでデータをとっていくのか、どこからとっていくか、建築、住宅で行った具体的な方法について情報交換情報提供をいただきました。

デジタルデザイン研究会（出席 7 名）

座長：川口さん（佐賀県工業技術センター）：

本研究会は、人数が少ない。どのような活用しているか、報告をいただきました。その後、この研究会をどうするか話し合いました。初めは多く、二つの（グループの）こともあった、その後一つになった。多かった頃は、どのように使っているか、システムの機種の情報交換など活発であった。今では、どの分野でも活用されている。今後続けるかどうかは、結論は、はっきり出ていません。研究会も 5 つくらいで、10 人くらいで進めるのがいいのではという意見も出ました。

新しい研究会を立ち上げるなら、どんな研究会があるか話し合いました。一つは、今日もご紹介のあった感性価値、あるいはキッズデザイン研究会などがどうか。デジタルデザインもよくわからない、地域デザインもよくわからない、地域ブランド研究会はどうか、これはお願いですが、分科会長さん、次期開催県さんが、研究会のアンケートをとっていただければと思います。

地域デザイン研究会（出席 17 名）

座長：榎谷さん（三重県科学技術振興センター）：

参加者17名、自己紹介と地域振興のデザイン事業、研究開発事業の紹介をしていただきました。ポジティブ、ネガティブな話も出てきて、人員削減、予算削減など、また事業が増えているところもある。京都は、デザインを研究の柱として出している。どこの機関も、デザインコンペ事業は継続しているところは多かった。昨年で打ち切りになったところ、また新しい事業を起こした話もあった。

公設機関全体の話として、独立行政法人化、岩手県、今年度からは、鳥取県。岩手県では、公務員型で研究事業、振興事業をされています。

大きなテーマでは、デザイン振興の、以前は、全試展というものがあった、各地で試作したもの、研究開発したものを展示していた時代があった。復活できないか、展示会みたいなものを作らどうか、どのような形がいいのか議論した。これについては、千葉県の岡村さんより報告をお願いします。

岡村さん（千葉県産業技術支援技術研究所）：

全体的にデザインのセクションが縮小している。公設試の活動、開発されたものを、外部にPRする場が必要ではないか。デザインハブなど展示スペース、発表スペースもある。たとえば、そのような場所を利用して、地方公設試の活動とか、地域で開発されたよいものとか、外部に対して発表する場所を、秋の開催とは別に、集積して総合的に、マスコミに取り上げてもらうとか、PRできる、そのような提案をしました。このような事を定期的にする、ものを買ったり売ったりできることをするとか、参加する企業にもメリットがあるとか、もう少し発表だけでなく、現実的なものにしないと行政とか外部に対しても弱くなる。総合的なものとして、予算はどうするかは、考えていく必要があるが、あまり負担にならない程度の活動をする、以上です。

座長：六本木で展示会をするにしても、商品販売はできないと思う。企業にも参加してもらう、選定作業などいろんなハードルがでてくる。各機関の成果発表できる、さらに販売できるようになれば良いと思う。

岡村さん：国のグッドデザインがありますが、規模は大きすぎる。ほとんどが大企業である。いい商品があつて、審査員に審査してもらって認定してもらいたいのですが、もう少し地道なところで、地方公設試がいいものを見つけて、場所で地方の製品をアピールしていく。そのような総合的なものを考えています。

座長：来年の開催県の山形の羽生田さんから、研究会は事前にテーマを言うべきではないかとの提案がありました。

議長：どうもありがとうございました。それぞれの座長さん方の報告に対して、ご質問、ご意見がありましたらいかがでしょうか。

(議長よりコメント)

最後の地域デザインの榎谷さん、千葉の方の意見ですが、なるほどと感心しています。公設試の所長になって、公設試の問題は何だろうか、と考えています。シーリングなど頭を抱えることがたくさんあります。分析するに、この存在感を強調する動きは弱く受け身だな、と感じています。先日機関長会議でも、全般的に受け身、宣伝しないのか、いろんなことやっている、これをうまく世の中にアピールすることが大事なことだ。どうしても、産業政策の入力の部分、ヒト、モノ、カネ、技術、産業は、最後にモノが売れて産業は完結する。物が売れる最後になればなるほど、人間的な要素とか、お客の感性とか要求、まさにデザインはそこに基づいているわけで、産業政策も入り口ばかりで、出口がないものばかりと言いつつ続けている。みなさんのお話を聞いて、デザインは大事だな、皆さん色々やっていると感じています。

橋本さん（広島県立総合技術研究所西部工業技術センター）：

議論のあった榎谷さんと岡村さんの思いは同じです。やる時にお金がない、このような会議の出席もむづかしい。国や経済省が、デザインは明るい方向を感じる、その事業に乗ってやっていくとか、それらの施策に関連してできないか。具体的にどうやるか、集まる方法、秋の分科会や福祉機器展の時期に話し合いの場をもてないか。場所の設定とか、色々やることがあるので、たとえば、関東の方に基礎を練っていただいて、前に進めることはできないか。

議長：会長としてコメントをお願いします。

会長：核心的なところにも触れてきているのですが、いくつか問題を整理しておきたいと思います。

分散討議は、年に1回、阿保さんに軽く座長をお願いしましたが、座長さんは大変と感じました。1人2～3分のスピーチで時間がたってしまう状況です。できれば、今のUD、デジタルデザイン、地域デザイン、これをガラッと変えることではなくて、経済省の方が言われたことを加味しながら、たぶん、地域資源活用などをいれて、3つが4つになるくらいの見直し案を私の方が中心にあって考えて、みなさんに計って変えていけたらと思います。

成果発表については、お金もかかることですし、いまここで、いつどこでと決めることはできないにしても、なんらかのかたちで、調査、トライアイルしていく必要があると思います。その時に、分科会全体でやることもいいですし、できるところ、できないところ

もあるし、小粒でも、公設試ならではの切り口を打ち出せるような、やはり、地域資源活用的な切り口、産学官連携の取り組みで話題性を呼ぶものなど、編集的に面白くみせる、見て面白くないといけないと思う。それを誰が、どうやっていくのかという話になる。その辺はここでは、（議論はできる）時間もないので、確実にその辺をつめて、実現していければと思う。抽象的で答えになっていませんが、それほど無理をせず、効果的なやり方を検討するということは、分科会長としては、お約束したいと思います。

池田さん（（独）産業技術総合研究所）：

今の件ですが、デザイン分科会の方でも考えていただくと同時に、ライフサイエンス部会の方でも、部会長の穂高に相談してみまして、他の分科会など、たとえば福祉分科会などは、HQLに、産総研の係わる公設試の製品を3コマ程度として展示している。少しくらいは、デザイン分科会さんから（の展示）も、場合によって少しぐらいはできるのではないかと。こちらの方で検討していきます。

場の設定の件ですが、ミーティングの場所であれば、東京の方でお台場ですが、臨海副都心センターの会議室は理由がつけば確保できます。

平田さん（広島県立総合技術研究所東部工業技術センター）：

発表の場の話ですが、全国試験場作品展に係わってきました。確か24回くらいまで続いたと思います。会場は、東京貿易振興奨励館だとか、晴海だとかいろいろありまして、1年間のデザイン研究の発表の場と位置づけて地域の制作品をだした経緯があります、3年ほど前ですが、青森県の所長さんに、こんなことがあったんですよと話したら、それはいいですね、復活できませんかね、との話もなりました。（しかし）たぐりよせるのは難しいのではないかと思います。先ほど産総研の方が言われた、HCRの福祉部会のコーナーにだしていき、さらに枠をひろげていく実績をつくっていく、家具関係ですと、東京家具見本市などあります。出展の数も減ってきています、ここに公設試コーナーを設けていただき、出展することも、話し合いで、可能ではないか。もちろん費用も発生すると思いますが、公的機関といくことでディスカウントもあるのではないかと。また、デザイン学会にだして実績をつくったあとで、分科会長さんをお願いしながら、かつての全試展のようなものを、公設試のデザイングループの発表の場をつくっていく。いまある既存の発表の場を活用して、実績づくりが必要ではないかと提案したいと思います。

会長：新規に行うのは、非常に労力がかかりますので、そういうようなものを利用しながら広めていく。やるときはやるような両面から考えていきたいと思います。

議長：他にございませんか。

橋本さん（（独）産業技術総合研究所）：

今回初めて出席させていただきました。せっかくつくったものを、できるだけ大勢の方に見てもらいたいと思います、展示会もひとつの方法と思いますが、人通りの多いところで見させていただくというのも手ではないかと思えます。まったく思いつきですが、たとえば、成田空港で、デザインコンテストの表彰式をやる。各地のデザインを知ってもらうこともできて、今まで関心をもたなかった人にも知ってもらうことができるのではないか。成田はターミナルも新しくなると聞いていますし、そこで表彰式をやらせて下さいと言えば、ひょっとすると現実的になるかもしれない。

議長：ほかにアイデアはありませんか。

小林さん（岩手県工業技術センター）：

H13年頃に地元の企業さんと南部鉄器のUDをとりいれた新商品をつくりまして、研究開発で終わらず、引き続き市場に出していくところの、我々の立場でできる支援を行っています。南部鉄器については、最終的にはGマークに出したんですが、企業さんまかせだとなかなか進まなくて。デパートで展示会があれば出すようにしています。店頭に立って商品の説明をすることもあります。今年は静岡でデザイン学会がありまして、そちらの方に作品集という形で出しました。いまあるものに出すのも結構労力がかかったけど、一度準備しておく、そのあとは楽にできるようになります。今回のデザイン学会の出展も、県の公設試からはそれほど多くはなかった。それぞれ製品があれば、積極的に出展しながら、それを全国のくくりで出すのは、それほど大変でない、いい話だと思いますので、積極的に参加していきたい。

・ 次期開催県及び次年度開催県について

会長：資料の8ページ、今年の秋についてはまだ決まっていません。秋には、研究発表会、とくに東京を中心に、南関東、埼玉、神奈川、千葉、茨城の各県にご協力いただいています。圧倒的に利便性ということで、東京が多い。実は阿保さんの方から、便利なんでいいですよ、と言われているんですが、開催案内を作ったり、事務的な手間もかかります。ここで議論する時間もないので、そのような問題もあることを理解しておいていただきたいと思えます。さきほどから、議論されています、成果発表とか、加味して考えたいと思えます。

結果として、決定ということではないですが、東京都さんをお願いすることになるかもしれません。従来の方法論として、研究発表としてやるからには、なんらかちょっとで役割分担ができるような、関東ブロックの方で 作業分担ができる方策はないかとか、もうすこし探してみたいと思えます。だいたい今申し上げたのは、千葉、埼玉、神奈川には少しお話を伺

っています。茨城にはお聞きしていません。みなさん共通して、便利ですから、でも大変です。ね、正直なところのようです。この辺も皆さんご理解をいただいております。あえて報告させていただいております。もうすこし時間をいただきたいと思います。

来年の春の開催は、すでに決定しています。山形県さんに承諾いただいております。山形県産業創造支援センターの武井さんにきていただいておりますので、一言お願いします。

武井さん（山形県産業創造支援センター）：

分科会長さんからお話がありましたように、次年度の春の開催については、山形が勤めさせていただくことになりました。来年度の会の運営につきまして、産業創造支援センタープラス工業技術センターの連携をとりながら、有意義な会の運営ができますように準備をいたしまして、皆様のおいでをお待ちしたいと思います。是非山形においで下さるようお待ちしております。

議長；ありがとうございます。

・ 次期分科会長について

分科会会長：次期分科会会長ですが、私は今年度で2年ということで、次の方にバトンタッチになります。どなたと決まっています、ブロックは東北、北海道からと聞いています。これから下期にかけてご相談させていただいて、無理のない状態で決まるようにもっていきたいと思います。ブロックの方にはご協力を得たいと思います。

鳥田さん（宮崎県工業技術センター）：

ブロックの幹事はいままでおりでいいのか。

分科会会長：研究会の方は、さきほど申し上げたとおり、すこし変えていったらどうか。3つが4つ、そのときは、それを来年度からか、その時に、代表幹事が変わるか、新規か、地域ブロックに関しては、各ブロックで決めていただいております。報告していただければいいかと思っております。

議長：これで終了させていただきます。